
HEROES 【戦国ヒーローズ】

みい×2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEROES【戦国ヒーローズ】

【Nコード】

N9940F

【作者名】

みい×2

【あらすじ】

サイラーとのあの対決のとき、ヒロが飛ばされたのは日本。しかも戦国時代？の京都だった。実は・・・語られなかったもうひとつの『HEROES』のお話があった。今回はその話について詳しく追っていききたい。

第一話：戦国京都？（前書き）

海外ドラマ「HEROES」のシーズン2を下敷きに書いたファンフィクションです。ネタばれありなのでご注意ください！

第一話：戦国京都？

第一話：戦国京都？

「うわぁ・・・」

勢い良く落ちてきたヒロは、そのまま顔面からくさむらの中に落ちた。

「・・・ぶっ、ぺっぺっ」

口の中に入った草を吐き出し、顔についた泥を拭う。

見渡すと、そこは一面の野原。

「・・・ここどこ？」

ヒロは何が起きたのか頭の中で整理した。

何人もの能力者を殺し、その特殊能力を奪ってきた恐ろしい『サイラー』とヒロたちは対決した。

ヒロは、未来のために・・・アンドーくんのために・・・『サイラー』を日本刀で刺した。

——手ごたえは、あった。

ヒロは手にした日本刀を見る。

思わず手が震えた。

そして・・・そして？

『サイラー』に投げ飛ばされビルにぶつかる寸前・・・時間を飛んだ。

何も考えずに時空を歪めたわけだが、一体「いつ」の「どこ」に来たというのか？

とりあえずキョロキョロしてみた。

なにか手がかりはないか？と。

「ヒヒーーーーン」

馬の鳴き声、そして多くの人の声がした。

「あ……」

あつという間に多くの武装した侍たちに囲まれてしまったヒロ。

鎧甲冑は、まさに……戦国時代？

まるで時代劇をみているような？何かの撮影現場なのか？

言葉を無くし「あの……その……これは？」とかつぶやいてみる。

やがてヒロの後ろに面をつけた侍が現れ、掛け声とともに戦が始まった。

「びーーーーーんち！」

ヒロは思わず顔色を変えた。

一斉に大勢の侍が弓を引き……矢を解き放ち、その矢がヒロとその後ろにいる一人の侍めがけて飛んできたからだ。

ヒューと風を切る音をさせ、緩やかなカーブで飛んでくる矢。

キラリと光る矢は、ヒロの息を止めようと飛んでくる。

ヒロは「えいっ」と時を止め、空中に止まった矢をおっかなびっくりで撤去した。

——矢は、間違いなく本物だ。

撮影なんかじゃない！

本物の戦だ……！！

「ぼく……戦国時代に来ちゃったの？」

泣きそうな声でそうつぶやいた。

そう・・・

ヒロがとっさに時間を超えてやって来たのは、戦国時代の京都だった。

しかも、時空を歪めたせいだ、皆の良く知る歴史とは少しへんてこな戦国時代の京都？だった・・・

そして、泣きそうなヒロの傍らで、成り行き上助けた侍がテレポトした拍子にどこかで頭を打ったのか、兜を押さえて唸っていた。

第二話：侍の話（前書き）

「少しへんてこな戦国時代の京都にやってきたヒロ。成り行き上、一人の侍を助けてしまうが・・・その侍は！」

第二話：侍の話

第二話：侍の話

「大丈夫だった？」

大勢に囲まれ矢を放たれていた危機一髪の場面から一緒にテレポトしたヒロは、何やら動転して唸っている侍に声をかけた。

「大丈夫なわけないだろうっ！！なんだよ！お前！・・・なんなんだよ！」

気が動転しつつ、ヒロを恐れる侍は、心配で差し出したヒロの手を振り払った。

そして、その振り払った勢いで、侍の面が取れた。

「あ・・・！アンドー君？」

そう・・・成り行き上、ヒロが助けた侍は・・・ヒロの会社の同僚であり唯一無二の親友のアンドーにそっくりだった。

「何？・・・俺のこと知ってるのか？」

「アンドー君だよね！？・・・なんでここに？」

親しげに手を伸ばしてくるヒロの手を侍のアンドーは振り払った。

「お前、何者なんだっ！確かに・・・俺は安藤だけど、お前なんか知らないぞ！」

俺は・・・人と会う約束をしていただけだ！！それなのに殺されかけたんだぞ！

・・・お前の差し金か？」

安藤はヒロが敵の一味なのではないかと訝って、刀に手をかけた。

「わ・・・ストップ！ストップ！！違うよ！僕は君を殺そうとな

んてしないよ!・・・むしろ助けてあげたんじゃないか!」
そう言われて、安藤は、さっきの状況を頭の中で反復した。

確かに・・・あの場合、このヘンテコな奴が居なかったら・・・今頃大量の矢を受けて死んでいただろう。

どうやったか知らないが・・・このヘンテコな奴が居たおかげで、何も無い空き地にいつのまにか居たようだ。

・・・と、いうことは・・・こいつに助けられた?のか???

「僕は武器なんかなにも持っていないよ・・・ね?信じて・・・アンダー君」

ヒロは敵意がないということを証明しようと両手をあげて、にっこり笑った。

その無邪気な笑顔に、なんら不審に思うべきところがないと思えて・・・安藤は、やっとヒロを信じることにした。

「・・・ああ。で、君は何者なんだ?俺は・・・安藤。今は・・・落ちぶれた侍だ」

精悍な顔つきで、古びた甲冑をガチャガチャさせながら彼は言った。

よく見ると・・・彼はヒロのよく知るアンダーに似ているが、少し違っていた。

もつと・・・野生的で、頬には傷跡があった。

そして、頭の上にはちょこんと鬚が結われていた。

目の前の侍は――もしかしたらアンダー君の先祖とかかもしれない。

「僕は・・・ヒロ。ナカムラ ヒロ。えっと・・・遠い遠いところから来たんだ」

ヒロは侍がアンドー君じゃなかったことにガツカリしながら寂しそうに笑った。

「・・・で、ヒロ。君は何者なんだ？」

そう聞かれると・・・返答に困る。

未来から来たヒーローですと答えるわけにもいかないし、未来から来た会社員と言っても通じないだろう。

「えっとね・・・遠いところから来た・・・旅人だよ」

「通りすがりの旅人か・・・？それなのに俺を助けたのか？」

「うん・・・君が僕をよく知ってる人に似てたから」

「その人が俺と同じ安藤というのだな」

腕をくんで、ヒロの話に納得した安藤侍だったが、肝心の「どうやって」助けられたのか？というポイントは忘れてしまっているらしい。

ちようどいいや・・・テレポートしたなんて説明できないもんね。

ヒロはそう思いながら、安藤侍に話を逸らそうと問いかけた。

「安藤さんは・・・あんなところで誰に会うことになってたの？」

その質問にやっと安藤は、目的を思い出した。

「そうだ！・・・俺はあの場所で、剣聖タケゾウに会うことになってたんだ！

彼が・・・仕える殿を紹介してくれるというので、俺はこうして剣をどれだけ使えるか？また戦の心得がどれだけあるか殿に見ていただくために身支度を整えてきた。

・・・なのに、本当にあんな風に矢を射られるとは思ってなかった・・・

ん？もしかして、あれが試験だったのか？」

「違うと思うよ・・・彼らは本気で安藤さんを殺す気だったよ。」

とてもテストとは思えないなあ・・・」

安藤はすっかり不思議そうな顔をして、「これは剣聖タケゾウ殿に聞いて見なければ！！」と叫んだ。

第三話：襲われた村（前書き）

戦国時代？の京都でヒロが出会ったのは、アンドー君のご先祖様だった！？安藤侍とヒロ・・・そして？

第三話：襲われた村

助けた侍はアンドー君そっくりだった。彼は就職先を求め、剣聖タケゾウに会うことになっていたという・・・一体。

「剣聖タケゾウ！！凄いよ！伝説の英雄じゃないか！安藤さん知り合いなの？」

目を輝かせながら、ヒロは小さいころからの憧れの剣聖に会えると胸を躍らせた。

「英雄かどうか知らないが・・・体格が良いから、一見皆に恐れられている。」

剣聖と名乗っているが、実際の腕前は見たことがない・・・

俺は酒を飲んでいるところを『良い奉公先がある』と声をかけられただけだ。

仕えるべき殿を失い、途方にくれていた俺には願ってもない話だった・・・」

野原を駆け抜けながら、安藤は自分の頭を整理するようにヒロにいきさつを話した。

「もうすぐだ・・・もうすぐ村が見える。その村の小さな飲み屋に・・・まだ彼はいるはずだ」

安藤の言うとおりに、茂みを掻き分けると、村が見えた。

しかし、その村は黒い煙をあげ、まだところどころちよろちよろと火が燃えていた。

村人たちは逃げ惑い、家財道具を運んでいる人や・・・怪我人・・・家畜を引っ張っている人が大勢いた。

「なんてことだ！」

安藤もヒロも、この村の緊急事態に驚いた。

「なんてことだ・・・お前、生きてたのか・・・？」
二人の背後で声がした。

振り返ると、そこには金髪の体格の良い男が侍の格好で仁王立ちになっていた。

誰？という顔でヒロが立ち尽くしていると、安藤がその男の胸ぐらを掴んで殴りかかった。

「な！？安藤さん？」

「こいつだ！・・・コイツが剣聖タケゾウだ！・・・分かったぞ！
お前、俺を身代わりにしようとしたんだな！」

安藤がボカッと一発殴ったところで、抵抗した剣聖に首を絞められ苦しそうな声で叫んだ。

「今頃気付いたのか・・・この馬鹿！」

ふん・・・そんな景気のいい話があるわけないって、ちょっと考えればわかるのに。

ほんとにこの国の連中は馬鹿ばかりだな！」

せせら笑いながら金髪の男は言った。

「・・・あの、お取り込み中すみませんが・・・あんた誰？」

ヒロの質問に金髪の男はニヤリと笑った。

「俺が、剣聖タケゾウだ。」

剣の神様・・・いい名前だろ！？」

剣聖を名乗る男に胸ぐらをつかまれたまま、安藤はけつと唾を吐いた。

「・・・あんたがあ？あの伝説の？」

「伝説かどうかは知らないが、この安藤とかいう侍を身代わりにしたてて俺が死んだと思わせる計画だったのに・・・」

台無しにしてくれたな〜！！」

怒った顔で、剣聖は安藤から手を離し、ヒロの方へと近づいてきた。

「な・・・なんのこと？だって・・・安藤君死んでいいことなんてないでしょ？」

「馬鹿か！・・・コイツが剣聖だ敵は思ってたんだから、死んだら俺が助かったんだよ！」

コイツが死んでないってことは、俺が殺されるだろっ！」

「・・・どういうこと？そもそも・・・なんで敵と戦ってるの？」

何が何だかわからないと説明を求める困り顔のヒロに、本当に何も知らないのかと剣聖は溜息をついた。

「しょうがない・・・いちから教えてやる」
こうして剣聖の話が始まった。

数日前、現在襲われた村は——小さな平和な村で、刀鍛冶師の村長とその美しい娘が村を守っていた。

しかし、戦国の動乱で落ち武者となり、今では山賊まがいのことをやっていた悪党が村にやってきた。

その悪党は、自らを『白ひげ將軍』と名乗り、山賊では飽き足らずに村を乗っ取ると宣言した。

それを阻止しようとした村長と娘はあっけなく捕まり・・・無抵抗な村人は震え上がった。

そこにやってきたのが・・・剣聖タケゾウ。この金髪の男。

村人はいったけのお金を渡すから、どうか村長と娘を助けて欲しいと願った。

とりあえず、剣聖は『白ひげ將軍』と面をつけて対峙した。

「私は剣聖だ——私を倒すことができれば『白ひげ』の名が世にとどろく。」

明日決闘し、打ち負かす事ができれば・・・あなたは有名人だ。この世を治める人物となるだろう。

私の首を掲げて本物の將軍になりなさい！

・・・しかし、打ち負かす事ができなければ・・・あなたは負け犬

だ。

私に敗れたことは黙っていてあげるから、おとなしく村長と娘をかえしなさい」と――

「あの・・・質問」

話の途中でヒロが手をあげた。

「なんだ？」

「剣聖は、今日は決闘で勝つはずだったんだよね。

どうして安藤くんに身代わりを？」

「勝てるわけないだろ？」

だから、安藤に死んでもらって、敵に剣聖が死んだと思わせる！」

「・・・で？」

「敵は安藤の首を持って、本当の將軍になるべく朝廷とか・・・どつか偉い人のところに行くだろ？」

その間に、村長と娘を解放する！俺は金をもらおう！！」

「・・・そんなうまいこといくかなあ」

「俺の計画にケチつけるな！」

ヒロと剣聖の話聞きながら、安藤はがつくりとうなだれた。

「・・・俺は・・・そんなことのために、今日あの場所に行ったのか」

第四話：三人寄ればなんとやら（前書き）

未来から来たヒロとアンドー君のご先祖様の安藤という侍、そして
剣聖タケゾウ。事情を解した三人が集まれば・・・どうになる？

第四話…三人寄ればなんとやら

「事情はわかったけどさ……この状況」

ヒロは襲われた村を指差し、逃げ惑う人々を背景に両手をあげて見せた。

「……どうにかしないといけないんじゃないの？」

剣聖は呆れていた。

「どうにかできるとでも？」

無理だ……無理！こんな村諦めて他に行ったほうがいい。

俺もそうする！」

「駄目だよ！！あんたは剣聖なんだから！

みんなの英雄なんだから！」

逃げようとする剣聖の手をヒロが引っ張った。

「い・や・だ！俺はなにもしない！」

その様子を見ていた安藤が加わった。

「おい！お前！！協力しろよ！……俺たち三人ならなんとかなるかもしれないだろ！！！」

「え……俺たち三人って？」

「俺と……ヒロと……剣聖」

そう言って、安藤はゆっくり自分・ヒロ・剣聖の順で指差して笑った。

「嫌だったら嫌だ！」

駄々をこねるようにそっぽ向いて頬を膨らませる剣聖に安藤は呆れた。

「あのな……お前、ちょっとは協力しろよ！」

だいたい、ヒロは……俺を助けてくれたんだぞ！凄い奴なんだ」

そう言ってヒロを指差して叫んだ。

「こいつがあ？」

本当にこんな奴が凄いのかと半信半疑で剣聖はヒロをチラッと見て嘲笑った。

ちよつとムツとしたヒロが、ポンと胸を叩いて言った。

「任せてよ！僕的能力で・・・三人で敵を倒そう！！」

「お前の能力って？」

見せてみろよと偉そうに腕組みして剣聖が言い寄った。

ふふんっと自信たっぷり眼鏡をあげたヒロは時間を止めて瞬間移動してみせた。

慌てふためく剣聖と安藤が可笑しかった。

「な・・・な！凄いだろ！！」

まるで自分のことのように自慢する安藤に、こくこくと剣聖も頷いた。

「どうやったんだ？・・・でも、これができれば！！」

100人の力を得たような物だ！！！！」

むんずと拳を天高く上げ、剣聖は言った。

「・・・百人力ってワケね」

剣聖の言葉を補って、安藤も腰の剣をすらりと抜いて掲げた。

「よし！じゃ、三人で敵を倒す計画をたてなきゃ！！」

興奮気味のヒロも駆け寄り、剣聖と安藤侍とヒロは力を合わせて敵の『白ひげ将軍』を倒すことを誓った。

剣聖の情報によると――

白ひげ将軍の居城は小高い丘の頂上。

城には100人もいると思われる腕のたつ侍たちがいて、そのうち数十人が交代で城の周囲を警備している。

たとえばヒロの能力があったとしても、真っ向勝負で敵う相手ではない……

大体、剣は殺傷能力は高いが大勢と戦うための道具ではない。

この場合、矢や鉄砲などの道具をそろえることが肝心だ。

「矢なら任せろ！」

剣聖はボーガンを見せた。

「いいね！……でも三人で大勢はやっぱり難しいなあ」

ヒロは考えた。

「……そうだ。ちょっと手がかかるけど罠とか作ろうか？」

「落とし穴とかか？」

「そう！殺さなくてもいいんだよ。大勢相手にできないから、ちょっと闘えない状態になってもらいたいな」

安藤とヒロはどんな罠にしようかと盛り上がる。

「罠か……面白くなってきたな！」

剣聖も悪戯好きな性格なのか、目を輝かせて「こういうのはどうだ？」と作戦会議に意欲をみせた。

三人の友情にも似た連帯感が生まれつつあった。

そして……

いよいよ……決行の日となった！

第五話：決戦！（前書き）

いよいよ・・・いよいよ白ひげの城へ乗り込む三人組。

第五話…決戦！

「いいか・・・行くぞ！」

剣聖が、密やかな声で合図し、白ひげ將軍の城を指差した。
安藤とヒロもそれに応えるように大きく頷いた。

「やあやあ！我こそは・・・偉大なる剣聖、タケゾウ也！！」
派手に剣を引き抜いた剣聖が大きな声で名乗った。

不意をつかれたようにきよんとしていた城の周囲の侍たちだったが、気を取り直し、すらりと抜いた刀で駆けて来る。

「・・・来たぞ」

剣聖が振り返り合図をすると、「まだだよ」とヒロが言った。

「もう少し・・・そのまま・・・引き寄せて！」

数人の侍たちが剣聖に切りかかるうと刀を振り上げた瞬間、侍たちはパツと剣聖の目前から消えた。

そして、前もって用意していた落とし穴にはまり、あちらこちらで
もがいている。

「落とし穴の底に油を流し込んであるから、なかなか這い上がって
これないでしょ？」

姿を現したヒロが、穴の中でもがく侍に笑いかけた。

「・・・面白いくらいに引つかかったな！」

剣聖が笑いながら先に進もうとすると、ヒロがその着物の裾をつか
む。

「剣聖！そこも落とし穴！！・・・ちゃんと目印つけてあるんだか
ら、よく見てね！」

あちらこちらに穴を掘ったものの、自分たちもその穴に落ちたので
は意味がない。

そのため通って良い所は目印に白い小石で丸を描いてあるのだった。
「そうだった・・・」

目印をたよりに歩き始めた剣聖。

城では、異常に気付いた他の侍たちが何やら戦支度をしはじめたようだ。

城の小窓から弓矢で構える者が見えた。

木の上で城の様子を窺っていた安藤がヒロと剣聖に手鏡で合図を送る。

チカチカと眩しい光の合図に気付いたヒロが、時を止め、飛んできた矢を丁寧に避けていく。

「ほんとあぶないなあ・・・」

鋭く上がった鏃をそっと掴んでポイポイとゴミでも捨てるように投げていく。

そうして、弓矢をかわして剣聖とヒロは城門に辿りついた。

やがて安藤も追いつく。

城に残る侍が刀を抜いて声をあげた。

しかし、威勢よく振り上げた刀は三人に落とされることなく、地面に侍の身体ごと転がった。

実は、迫りくる侍たちの時をヒロが止め、足元にロープを張り、ひっかけて一斉に転んでもらったのである。

先頭の者がこければ、後ろから追隨するものも勢いあまってその上に覆いかぶさっていく・・・下敷きになった者は悲鳴をあげた。

もちろん、ヒロがすることを承知だった剣聖と安藤は、その騒動から一步身を引き無事だった。

「さ、先を急ごう！」

ヒロの合図で三人は城の中へと入っていく。

「俺、まだ刀抜いてないぞ！！凄いな」

安藤がここまで苦労なく勝ち進んでいることを面白そうに笑った。

「ちょっと物足りないくらいだ」

剣聖も嘲笑うかのように言った。

「二人とも、安心して居る場合じゃないよ！さあ、いっぱい出てきたよ」

ヒロが言うように、バタバタと他の場所で待機していた侍も集まってきた。

剣聖がボーガンで射撃しつつ、安藤が自慢の刀さばきで目の前の侍を蹴散らしていく。

「あ・・・安藤くん、凄いじゃん！！」

目を輝かせて尊敬するように見つめるヒロに安藤は微笑んだ。

「この時代を生き抜くには、これくらいは当然！」

余所見した安藤に影に隠れていた侍が切りかかる。

「あ、危ない・・・安藤くんっ！！」

ヒロはあわや・・・というところで安藤を助けた。

一瞬死ぬかと思って目を閉じた安藤だったが、無事だったことに気付きヒロに礼を言う。

「・・・ヒロが助けてくれたんだな。俺より、お前の方が凄いよ・・・ありがとう」

「そんな」

——安藤君、君の子孫とも僕はこうやって助け合ってきたんだから・・・いいんだよ

そう思いながら嬉しそうにヒロは微笑んだ。

「おい・・・二人とも・・・いよいよ白ひげの部屋だ！」

息を切らせて、力強くまっすぐに剣聖が指差した先には・・・絢爛豪華に彩られた襖。

きつとこの奥に・・・

白ひげ将軍がいるに違いない！

「覚悟はいいか？」

剣聖の言葉に、ヒロも安藤も頷いた。

「行くぞー！！」

襖が、今・・・開かれた！！

第六話：白ひげ危機一髪（前書き）

とうとう白ひげ将軍が姿を現す！！その時、ヒロはどうするのか？

第六話：白ひげ危機一髪

「・・・何よ？あんたたち・・・」

襖を開けると、きりつと引き締まった顔の女性が額に白い鉢巻をし、後ろにひとつに束ねた髪を乱しながら振り上げた白刃をピタリと止めた。

「わあっ！！」

ヒロ、安藤、剣聖が驚いた。

まさか、白ひげ將軍が女性だったとは・・・？ヒロと安藤は二人顔を見合わせた。

「・・・ヤエコ」

剣聖がその女性に声をかけた。

「え・・・この人が？村の刀鍛冶師の娘さん？？」

「これが・・・捕らわれの姫？」

素っ頓狂な声で、またもやヒロとアンドーが顔を見合わせた。

「その二人！！・・・なんか、文句でもあるの？」

かっと思開いた目に、おそれをなし、ふたりはしょぼんと言った。

「・・・ありません」

ヒロも安藤も、捕らわれの身になって美しく泣いて待っている可憐な姫を想像していた。

ヤエコは、可憐ではあるがたくし上げた着物の裾、いかにも勇ましそうでお転婆そうな印象だった。

「あんたたちの喧騒を聞いて、白ひげは最終兵器を持ってくるとか言っ出て行ったのよ。」

その隙に、その見張りをやつつけて、これを機に逃げようと思っていたの！

そしたら、いきなり襖が開くから・・・敵かと思ったわ」
ふうっと一息つくと、ヤエコはようやく剣を鞘に収めた。

彼女の後ろには、たしかにこてんぱんにやられた侍が3人転がっていた。

その目を回している三人を刀鍛冶師のおじさんが縄で縛り付けていた。

「・・・ヤエコも腕をあげたのう。女剣士として惚れ惚れするほどじゃ」

おじさんの言うとおり、さっきは怖かったが、額に光る汗も麗しい女剣士のヤエコだった。

「・・・で、あんたたちは何？」

ヤエコの質問に、まず剣聖が答えた。

「俺は、村人に頼まれて・・・君を助けに来た」

肩膝について手を差し伸べる剣聖に、ヤエコは「ふうん」と冷たく言う。

「・・・で、この二人は剣聖さんの友達？」

「あ、僕は・・・ヒロ。」

えっと・・・遠いところから来た旅人です。

成り行き上、剣聖のお手伝いをすることに・・・」

「俺は安藤。剣聖に頼まれてここに加勢した」

ヒロと安藤の答えを聞いて、「なるほど」とヤエコは二人を観察した。

「じゃ、頑張っここから逃げましょう」

ヤエコの言葉に「承知」と三人は頷いた。

「・・・そう簡単に逃げられるかな？」

ドスの聞いた声が聞こえた。

壁の一部がぐるりと回転し、そこにツルつ禿げの白いひげを生やした大男が現れた。

「・・・白ひげ！」

ヤエコは大男を睨んで、腰の剣に手をそえる。

すかさず剣聖がヤエコを庇うように前に出た。

「・・・ときなさい！剣聖とは名ばかりで構えもなっていないくせに！」

小声でつぶやきながらヤエコが剣聖の背中を睨む。

「・・・そういうな、ヤエコ。おれは剣聖の名を騙っているが、騎士には違いない。」

この状況で女性の背中に隠れることなどできない」
にっとなつと、剣聖は剣をスラリと抜いた。

「剣聖！！・・・僕たちも加勢しなきゃ」

ヒロが剣聖の近くに行こうとするのを安藤が止める。

「ヒロ！！白ひげも侍だ・・・侍の一騎打ちに加勢は無用だ」
安藤は真剣な目でヒロの肩を掴み、その行動を止めた。

「でも・・・でも・・・」

「ヒロ・・・剣聖を信じろ！」

安藤がまっすぐ顔を向けたさを、ヒロも覚悟を決めて見据えた。

——これは侍同士の戦いなんだ

「あれ？・・・安藤。そもそも剣聖は侍だったわけ？」

ヒロは思いついた疑問を安藤に投げかける。

一瞬、返答に困った安藤が、「・・・たぶん、侍かな？」と頼りなさそうに言った。

さっと剣聖の剣が振り下ろされた。

切ったのは・・・燭台だった。

蠟燭が床に落ち、油が流れた。

「逃げるぞ！・・・急げっ」

必死な形相の剣聖が、くると踵を返し猛ダッシュで逃げ出した。

驚いた顔のヤエコは父親を連れて「こんなことだろうと思ったわ」とぼやく。

「ま、三十六計逃げるに然りっていうしな！」

安藤も呆然としたままのヒロの首根っこを掴み逃げ出した。

蜘蛛の子を散らすように逃げ出したのを白ひげ將軍が許すはずがない。

「逃がすかー！！めちゃくちゃにしゃがって！！この城もろとも吹き飛ばしてやる！」

そして、白ひげ將軍の後ろに控えていた黒い大砲が姿を現し、火花が飛んだ。

——大爆発！！

もう駄目だ。

その場に居た者は全て死を覚悟し、思わず目を閉じた。

第七話：それでも僕は未来に戻る（前書き）

白ひげ將軍が放った大砲がその場にいた者全てを巻き込んでゆく・
・絶体絶命の中、ヒロがとった行動は！？

第七話…それでも僕は未来に戻る

爆風で飛ばされた身体が宙に舞い、着地した。

爆音が耳を劈いたはずだった――

しかし、そこは白ひげの城ではなく・・・桜の花舞い散るのどこな場所だった。

まず、ヤエコが目を開けると、目の前に青い空が広がっていた。

「・・・大丈夫？」

ヒロと呼ばれていた男がヤエコに手を伸ばし、笑いかけた。

「ええ・・・無事だったの？」

「うん・・・ここは白ひげの城から少し離れた場所なんだ。

・・・僕が最初にこの時代に来たところ。桜が咲くほど暖かくなっていたんだね」

ヤエコは起き上がると、ひらりと舞い落ちた桜の花びらを手にして笑った。

「・・・？・・・本当ね。春がきていたのね」

ヤエコが周りを見渡すと、そこには刀鍛冶師の父が腰を打ったのか、「いてて・・・」と唸っていて、またそのすぐ近くに安藤という男が居て、父を介抱してくれていた。

「・・・剣聖は？」

ヒロが言うように、剣聖の姿が近くに見当たらなかった。

「おかしいな・・・いっしょに時を飛んだはずなのに」

ヒロが歯噛みしながらぶつぶつ言う。

意味がわからないが、剣聖に何かあったのではないかとヤエコも心配になった。

草むらの中に剣聖が居た。

爆発時に胸に破片が刺さって血がどくどくと流れていた。

「・・・っ 剣聖!!」

ヤエコが蒼白な顔で剣聖の胸の傷口を押さえた。

「・・・ヤエコ・・・俺は、死ぬのか？」

「喋らないでっ!!」

震える手でヤエコは剣聖の傷口を何とかしようと、破片を思い切つて抜いた。

悲痛な叫びが上がり、ヒロは「こんなはずじゃ・・・」と耳を覆った。

―― 僕のせいだ・・・ どうしよう

ヒロが頭を抱えていたとき、ヤエコがヒロを呼んだ。

「ヒロっ!! こっち来てっ!!」

ヒロはもつれる足で、剣聖の傍にぺたっと座った。

「・・・見て!!・・・信じられる? こんなこと」

ヤエコは剣聖の傷口を指差す――すると、みるみるうちに傷が塞がっていった。

「・・・剣聖は能力者だったんだ」

目を輝かせてヒロは喜びのあまりヤエコに抱きついた。

「ちよっと・・・ヒロ」

「あ、ごめんごめん・・・うれしくって、つい」

気のせいか、ヤエコの頬は薄桃色に染まっていた。

「・・・俺、死ぬなら・・・その前に、ヤエコ・・・口づけを・・・」

――

剣聖が手を伸ばしてきたが、とうに塞がった傷をぺちっと叩くと、ヤエコは「当分死なないから! 大丈夫」と舌を出した。

「なんだよ・・・人が死ぬってときに・・・ってあれ? 痛くない・・・」

やっと傷が治っていることに気が付いた剣聖が驚いていた。

「・・・どういふことだ、一体」

「きっと・・・僕のせいだ」

ヒロが剣聖に言った。

「・・・？」

「僕も不思議な能力があるんだよ、剣聖。

僕は今まであまり上手く使いこなせてなかった・・・だからこんな遠くまで来ちゃった。

でも・・・意味が無いことじゃなかったんだ。

僕たち能力者は、お互いの能力に影響を与えているのかもしれない。僕が・・・剣聖、あなたに出会ったことで・・・僕的能力は、より強固なものとなった。

そして・・・あなたの能力も開花させたんだ」

いままでの出来事を頭で整理しながら、ヒロは言った。

そうすると、今までのことが起こるべくして起こった事のように思えてきた。

これだけ大勢の人間と時間を飛べたことが、より大きな自信となっていた。

———
今なら、この場所で・・・未来に戻る気がする！

何かを悟ったように晴れやかなヒロとは対照的に、剣聖は渋い顔で怒った。

「・・・余計なことをしたな！俺は・・・変な力などいらないうっ！」

「・・・剣聖？」

「・・・おまえのことを、一生・・・一生許さないからなっ！！！」
鬼のような形相で、ヒロの襟元を掴みかかる剣聖をやエコが止めた。

「剣聖・・・落ち着いて」

やエコの制止に不満そうに剣聖はその場から立ち去った。

「・・・ヒロ、おまえなんか・・・いなくなってしまうえ!」
怒りに満ちた声で捨て台詞をはきながら・・・

「ヒロ・・・剣聖にはあとで、ちゃんと言っておきます。
あなたは、まぎれもなく私たちを助けてくれた・・・恩人です」
「・・・でも、僕は・・・剣聖に余計なことをしてしまったのかもしれない」

「この世に、余計なことなど・・・ないのですよ。
ここであなたと私が出会ったのも意味のあることでしょう」
屈託無く笑うヤエコはさっきまでの勇ましい女剣士と違い、聖母のように神々しかった。

「・・・僕、帰ります。」

これ以上・・・誰かに迷惑かけたくないから」
ヒロの言葉に寂しそうな顔をしたヤエコは、ヒロの頬に触れるか触れないかのキスをした。

「・・・ヒロが去っても、あなたという英雄が我らを救ったこと、私は忘れません」
ヤエコの言葉に、ヒロは涙が出そうになった。

「ヒロ・・・帰るのか?」

話の一部を聞いていたらしい安藤が、ヒロに言った。

「ああ・・・安藤。君はここでもいい人だね。」

僕、君がこんなに勇敢で素敵な侍だったこと・・・アンドーに、とと。

君にそっくりな僕の友達に伝えるよ!」

「そんな・・・ヒロ!行くなよ!!」

お前となら、この時代を乗り切れる気がするのに・・・」
弱気な発言をする安藤の肩に、ヒロが手を置いた。

「君なら、一人でも乗り切れる・・・君は侍なんだ。」

君が、白ひげに向う剣聖を信じたように、今度は自分自身を信じて。僕は、君が立派に生き抜いていくことを信じてるからねっ！！

・・・また、会おう！アンドー！！」

涙を溜めた瞳が、その雫をこぼさないように下を向かずまっすぐに前を見据えると、ヒロは笑った。

「じゃ・・・」

現代のヤマガト工業――

ヒロの心配をするアンドーのもとに、ヒロが帰る。

「ヒロ！！心配してたんだぞ！」

彼の声を懐かしく聞きながら、ヒロは安藤に礼を言う。

「安藤。アンドーという子孫を残してくれて・・・ありがとう」

「は？・・・何か言ったか？」

「なんでもない！・・・それより、僕、君のご先祖サマに会っちゃった」

凄く勇敢で男らしい侍の中の侍だったよ！！」

第七話：それでも僕は未来に戻る（後書き）

えっと・・・あとがきです。

海外ドラマ「HEROES」が好きで、特にアンドーとヒロのコンビが大好きです。今回はシーズン2の戦国？京都で二人が活躍したらしいのになという気持ちからできたお話ですが・・・楽しんで頂けましたでしょうか？感想・ご意見お待ちしております。ここまです読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9940f/>

HEROES 【戦国ヒーローズ】

2010年10月21日23時31分発行